

平成 30 年 6 月 12 日現在

機関番号：32619

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26381147

研究課題名(和文) 大学における有効なキャリア支援に向けての実証的研究 - ジェンダーの視点からの分析

研究課題名(英文) Empirical study for effective career support in Japanese universities

研究代表者

谷田川 ルミ (Yatagawa, Rumi)

芝浦工業大学・工学部・教授

研究者番号：20624266

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究においては現代社会における大学生の卒業後のキャリア展望とジェンダー意識との関係を実証的に明らかにし、その実態との関連で大学におけるキャリア支援のあり方を考察することを目的として調査・分析を行った。分析の結果、質問紙調査からは、女子学生の卒業後のライフコース展望は、近年になるにつれて、仕事志向が大きく減少し、家庭志向が上昇する動きがみられた。その理由を明らかにするためにヒアリング調査を分析した結果、家庭における親の影響、仕事との両立不安、伝統的な男性役割の容認、男性の育児参加への不信感といった意識が浮き彫りとなった。

研究成果の概要(英文)：This study empirically clarified the relationship between career prospects of university students and gender consciousness in contemporary society. Results of the analysis, from the questionnaire survey, as the female student graduated from the life course perspective, in recent years, the work orientation has declined greatly and the family orientation has risen. As a result of conducting and analyzing the interview survey, it was found that (1) influence of parents at home, (2) anxiety about compatibility with work, (3) acceptance of traditional male roles, and (4) distrust of men participating in childcare consciousness became clear. Thus, concerning the causes of young women's family-oriented increase, there is social unrest, such as the existence of persistent gender role norm from the previous generation and distrust of male participation in childcare. As a result, it seems to have a life course perspective such as "If I have a child, I want live in a family-centered way".

研究分野：Sociology of Education

キーワード：University Student Gender Career prospect Career guidance

1. 研究開始当初の背景

日本におけるキャリア教育は中等教育を発祥としているため、大学生に対するキャリア教育が注目されるようになったのは就職難が深刻となった2000年代のことである。そのため、学術的に研究対象となることは未だに少ない現状にある。また、キャリアにかかわる問題を扱う際には、ジェンダーの視点が不可欠であるが、ジェンダーの視点を取り入れた支援は女子大学の女子学生のみを対象とした事例が多く、一般大学の学生への支援に関するものはほとんどみられない。したがって、従来の研究と実践で見落とされてきた「ジェンダー」と「キャリア」という密接な関係にある概念を結び付け、大学生の現状を実証的に分析することを通して、大学におけるキャリア支援の実践に寄与する基礎的な研究成果を析出する必要があるものと考えられる。

2. 研究の目的

本研究は、大学の大衆化が進行した現代社会における大学生の卒業後のキャリア展望とジェンダー意識との関係を実証的に明らかにし、その実態との関連で大学におけるキャリア支援のあり方を考察することを目的としている。

一般的に、女性は男性と比べて、結婚や出産などによって、ライフコースが複雑になりやすい傾向がある。一方で、男性も「一家の大黒柱」というジェンダー規範によって、卒業後の進路選択への重圧は女性以上に大きいものと思われる。このように、将来のキャリア選択は、性別役割意識に代表されるジェンダー規範の影響を受けやすい。それゆえ、大学生たちが就職活動をはじめとする実際の人生選択に直面した時、彼らがどのようなジェンダー意識を持っているかということは、キャリア支援策を検討する上で、非常に重要なファクターであるといえる。さらに、本格的な男女共同参画社会を目指すにあたって、キャリアの問題は女子学生のみのものでなく、男子学生にもかかわる問題である。

このような現状を受け、現実に即した有効なキャリア支援策を構築するにあたっては、現代の大学生のジェンダー意識とライフコース選択の関係を調査・分析し、実態の把握をする必要があるさらに、調査結果をもとにして、ジェンダーの視点を取り入れたキャリア支援のあり方を考察することで、男女共同参画社会の一員としての意識の醸成にもつながるものと考えられる。

3. 研究の方法

研究方法としては、文献調査、質問紙調査による計量的分析、ヒアリング調査による質的分析を実施することとした。

(1) 文献調査

現代の日本の大学におけるキャリア教育、

キャリア支援をテーマとした最新の文献、研究論文等から、本研究テーマの周辺領域の研究の進捗状況を再確認する。また、キャリア支援の歴史的展開を探るため、戦後の大学における厚生補導（現在の学生支援）に関する文献、政策文書、専門雑誌等の資料を収集・整理し、キャリア支援のこれまでの発展の経過を明らかにする。

(2) 第1回ヒアリング調査

質問紙調査に先立って、大学生に対するヒアリング調査を実施する。ヒアリングにおいては、比較的、自由な形式で学生に進学時の意識、キャリア展望、現在の大学生活、学習の現状、将来への不安などを語ってもらい、それらのデータを整理することから、本研究の分析枠組みを見直し分析計画を立てる。その上で、質問紙調査の構成と質問項目を決定する。

(3) 質問紙調査

全国の大学生を対象とした質問紙調査を実施し、現代の大学生のジェンダー意識とキャリア意識の関連、大学生活についての実態を明らかにする。今回は研究協力者として関わっている別の大学生調査プロジェクトで実施する大規模調査に本研究に関連する質問項目を入れてもらうことになり、その調査データを用いて計量的な分析を実施する。

(4) 質問紙調査の集計、分析

初年度から2年目にかけて質問紙調査の結果を集計し、統計ソフトを用いてクロス集計レベルの分析を行う。その上で、精査が必要と思われる項目については、再度、ヒアリング調査を実施し、詳細な分析の足掛かりとする。

(5) 第2回ヒアリング調査

第2回ヒアリング調査を実施し、計量分析結果の裏付けを行う。加えて、ヒアリング調査結果を用いて、質的分析を行い、計量分析でカバーしきれない部分を補完する。

(6) 成果発表

ヒアリング調査、質問紙調査の結果について関連学会で報告し、研究報告論文としてまとめ、研究成果として発表する。

4. 研究成果

上記の研究計画に基づき、文献調査、質問紙調査、ヒアリング調査を中心に研究を進めた。

(1) 文献調査について

研究代表者の研究分野である教育社会学においては、近年、ジェンダー研究は下火であると言われている。しかし、少ないながらも貴重な研究成果が挙げられているため、それらの著書や論文を収集し、最新の研究動向

を探る作業を行った。その結果、近年におけるジェンダー研究の焦点が女性の身体の問題やセクシャル・マイノリティといった問題へと移っており、本研究が目指しているキャリア問題や進路選択に関する研究は著しく減少していることが明らかとなった。しかし、「女性と進路」研究が最も盛んだったのは1990年代後半であったことを鑑みると、日本社会が長期の景気低迷に直面し、大学生の就職問題が大学教育問題となった2000年代以降の「女性と進路、キャリア」問題を改めて研究する意義は非常に大きい。さらには、男性の家事育児に対する意識も近年においては大きく異なってきたことも女性のキャリア問題とは無関係ではないことも予想される。

また、ジェンダー関連のみならず、大学におけるキャリア支援、学生支援関連の文献、論文、実線報告書、文部科学省の政策文書の収集も並行して進めた。そこから浮かび上がったことは、国の大学教育政策としての「質保証」が打ち出され、各大学は学生の学修成果を可視化するようになったのと同時に、就職率をいかに上げるかといった「出口管理」を熱心に行うといった動きがみられることである。

以上の文献調査を通して、研究目的であった「従来の研究と実践で見落とされてきた「ジェンダー」と「キャリア」という密接な関係にある概念を結び付け、大学生の現状を実証的に分析することを通して、大学におけるキャリア支援の実践に寄与する基礎的な研究成果を析出する」ことを目指し、女子学生、男子学生双方のジェンダー意識の現代の特性の実態、そして、将来展望との関係のメカニズムはどのようになっているのかという問題設定をし、調査分析を行った。

(2) 質問紙調査

研究計画の段階では、ヒアリング調査を行ったうえで質問紙を作成し、調査するという計画であったが、研究代表者がこれまで10数年にわたって携わってきた学生文化研究会による大規模大学生調査（代表 武内清・敬愛大学特任教授・当時）の継続調査が行われ、筆者の問題関心を基にした質問項目も入れてもらえることとなった。このデータは、1997年、2003年、2007年、2013年の16年間4時点で調査をしており、筆者の問題関心である大学生のライフコース展望についての質問項目も1997年調査から継続して聞いており、16年間の大学生の意識の変化を追うことが可能となる。そのため、今回はデータの使用許可を取ったうえで、本研究の分析に使用した。

分析の結果、女子学生の卒業後のライフコース希望は、1997年～2003年にかけては、仕事志向が上昇し、家庭志向が減少する傾向を示していたが、2007年調査においては、仕事志向が大きく減少し、家庭志向が上昇する

動きがあった。さらに、2013年調査において、家庭志向は上昇を続けており、近年の女子学生は、将来のライフコース希望として、以前のように仕事を中心とした生き方を希望せず、家事や育児を中心とした生き方を希望するようになっていることが明らかとなった。

この傾向は、大学によって差がみられている。入学難易度や専門分野、大学の立地（都市部か地方か）などによって、女子学生のキャリア意識に差がみられている。

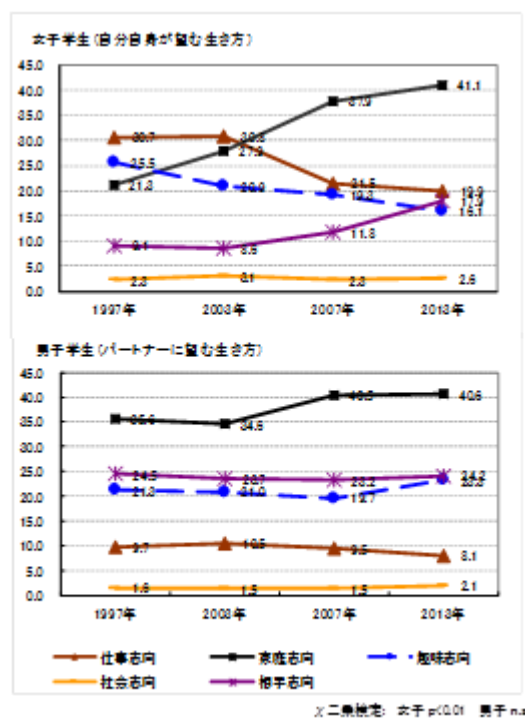


図1 ライフコース展望の4時点変化(男女別)

(3) ヒアリング調査

上記の質問紙調査の結果を補完することを目的として、女子学生と男子学生それぞれに対して、自身の将来のキャリア展望についてのヒアリング調査を2回にわたって行った。対象としては、学力ランク上位校とされる私学総合大学の男女学生、中堅の共学総合大学の男女学生、資格取得を中心とした教育系大学の女子学生それぞれ数名を選出し、調査を行った。

第1回目のヒアリング調査においては、男子学生に関しては大学の種別に関わらず「相手（パートナー）の希望に合わせたい」「まだ分からない」という回答が多くみられた。一方、女子学生においては、大学の種類にかかわらず「仕事志向」「仕事と家庭の両立志向」が多くみられた。しかし、「一生働くか」との問いについては、「出産までは働く」との回答が多くを占め、出産退職を想定し、その後は家庭中心の生活を送るといったライフコース展望を描いている女子学生像が浮き彫りとなった。ここから、「仕事志向」の減少と「家庭志向」の上昇といった傾向の背景には、「出産までは働くが、ゆくゆくは家

庭中心の生活をする」といった意識があるものと思われる。

また、上位校と資格取得中心の大学の女子学生の意識の違いとしては、出産後の家庭中心の生活となった後の展望で、上位校の女子学生は、趣味や特技を生かした無理のない仕事をしたいと考えているのに対し、資格取得中心の大学の女子学生たちは、取得した資格を生かして短時間のパートや派遣などで働きたいと考えている傾向がみられた。質問紙調査の数字からは、単純に「家庭志向」の増加といった現象をみてとることができるが、同じ「家庭志向」であっても、属性別にみていくと、その中身はかなり異なっていることが明らかとなった。

第2回目のヒアリング調査においては、①家庭における親の影響、②仕事との両立不安、③伝統的な男性役割の容認、④男性の育児参加への不信感といった回答がみられた。

①については、今回のインタビュー対象者のほとんどにおいて、自分自身の家庭がライフコース展望の基本的なモデルになっているということである。将来持ちたいと考えている子どもの数についても、自身のきょうだいと同じような性別構成、人数を挙げてくるケースが多くみられた。

②としては、今回のインタビュー対象者では、父親が働き、母親が家事・育児全般に加えてパートで働いているというケースが多くみられた。調査対象者の女子学生の多くは基本的には仕事も家庭もという「両立志向」であり「できれば仕事は続けたい」という意識を持っていた。しかし、母親が家事・育児とパートとはいえ仕事の両方を1人で担っている姿を見てきたことで「大変そう」という意識を持っている。また子どもを「ちゃんと」育てなければならぬという意識を持っており、そのためには家庭中心の生活を取ると考えるに至っている様子がうかがわれた。将来「子どもを持ちたい」とは今回調査対象となった女子学生全員が希望しており、育児と仕事とのバランスに言及しているケースが多く見られた。

③については、今回の調査では伝統的な男性役割や男性上位の意識を持っているケースがいくつか見られた。これらの語りは、男性が主に家庭の経済を担うことが大前提となっており、たとえ自分も仕事をしていたとしても「男性にはかなわない」といった意識から、自分が家庭で家事・育児をする＝家庭志向といった意識を持つに至ったことがうかがわれた。

④については、近年の「男性の育児参加」「イクメン」といった風潮に対して疑惑のまなざしを持っている女子学生の語りが見られた。家事育児に積極的に参加する男性について世間で取り沙汰されているとはいっても、共働きで子どもを持った場合、結局は女性に負担が集中することを彼女たちの多くは予見している。前述のように、一人で家事

も育児も仕事もこなすことの困難を避けるために「家庭志向」となっている可能性が示唆されていた。

以上のインタビュー結果の分析から、若年女性がいかなる理由で「家庭志向」（または「仕事志向」）を支持しているのか、という点については、まず、仕事と家事・育児との両立に対する不安が挙げられる。その背景としては出身家庭において自身の母親が仕事に加えて家事・育児も全て担っていて苦労していた姿を見ながら育ってきたということが挙げられる。加えて、子どもを持ちたいと考えた場合、「“ちゃんと”育てないと」「子どものためには仕事より家庭」という良妻賢母プレッシャーが現代の女子学生にも働いていた。

こうした「両立不安」、「良妻賢母プレッシャー」を解決する一つ的手段として、近年では「男性の育児参加」や「イクメン」が話題になっているが、彼女たちはこうした男性の家事・育児参加についての不信感も根強い。こうした不信感の裏側には「男の人の仕事のほうが大変だから」といった根強い伝統的な男性役割の容認といった意識が見受けられた。

このように、若年女性の家庭志向の増加については若者の意識の問題のみでも社会的背景のみでも説明がつかない前世代からの根強い性別役割をめぐる規範の存在と男性の育児参加に対する不信感といった社会的不安がある。性別役割分業に対する社会的認識も男女平等の方向へと動いてはいるが、女子学生たちの意識を根底から解放するにはいたっておらず、「子どもを持つなら家庭中心の生き方」といったライフコース展望を抱いているものと思われる。

(4) まとめと今後の課題

1990年代以降に生まれ、これまで日本が経験したことのない長期の不況による閉塞感漂う社会の中で成長してきた現代の大学生の意識の変化は、大学教育に携わる年長の者にとっては捉えづらいものである。有効な学生支援、キャリア支援を展開するためには、継続的に大学生の現状を把握し、大学教育に反映させることは、現代の日本の大学におけるキャリア支援の喫緊の課題の一つであると考えられる。

本研究の分析からは、大学生のライフコース展望(=キャリア意識)には、ジェンダーにかかわる意識が大きくかかわっていることが改めて明らかとなっている。こうした現状から、キャリア支援を行う際には、これまで、特に女子学生向けに行われてきたような、「仕事」「職業」を意味する「キャリア」へと導く支援を行うだけではなく、ジェンダーの視点から、労働や福利厚生にかかわる法律や地域、職場等の育児支援の現状、就業継続／非継続の場合の生涯収入の違い、日本社会における平均年収といった生活と労働にかか

わる基礎的な知識を伝えることも、キャリア支援の重要な課題として挙げられる。こうした課題に取り組むことによって、女子学生、男子学生共に、より現実的なキャリアを考えることが可能になるものと考えられる。また、こうした視点からのキャリア支援は、女子大学などで多く行われてきた傾向があるが、女子大のみならず、共学大学にもジェンダーの視点を取り入れたキャリア科目や講演などを積極的に導入する必要性も考えられる。

加えて、「ジェンダー」は「女性のための」という意味ではなく、ライフコース上に現れる「男女の関係性」を考えるという概念である。そのため、キャリア関連の科目については、「女子学生向け」の講義や講座ではなく、男女双方が受講できるような体制を整えることも課題として挙げられる。女子学生、男子学生双方に対し、キャリア支援を行うことで、彼らが職業選択をする際に、育児・出産休暇などの企業の福利厚生にも目を向ける契機にもなり、学生自身にとってただ企業の一員として労働するだけではなく、労働者としての権利を能動的に自覚する立場としての視点を養うことにもつながる。こうした大学側、学生側の意識の変化によって、企業がジェンダー平等を意識した福利厚生の導入を検討する方向へとつながる可能性もあるだろう。

本研究による調査データについては、まだ完全にまとめ切れていない状況である。今後も継続してデータの分析を進め、成果を発表し続けていく必要がある。また、ヒアリング調査による成果は大きく、数値データの分析では推測にすぎなかった部分の補完を行うことが可能である。今後もサンプルの属性をコントロールしたうえで、ヒアリング調査を継続して実施する必要がある。

5. 主な発表論文等

〔論文・報告書等〕(計4件)

- ①谷田川ルミ「大学生の将来展望－男子学生からみた女子学生／女子学生からみた男子学生」『IDE 現代の高等教育』(IDE 大学協会) 2015年12月号, pp. 65-69.
- ②谷田川ルミ「大学生の人間関係」『「内向き」は本当か? 2014年大学生の意識調査報告書－昭和の大学生、平成の大学生－』, 全国大学生生活協同組合連合会, 2015, pp. 20-25.
- ③谷田川ルミ「大学生の海外・留学意識と将来展望」『「内向き」は本当か? 2014年大学生の意識調査報告書－昭和の大学生、平成の大学生－』, 全国大学生生活協同組合連合会, 2015, pp. 26-32.
- ④谷田川ルミ「現代大学生のキャリアとジェンダー－女子学生と男子学生の意識の関係性の分析－」武内清(研究代表)平成24～26年度日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(B))『現代の学生文化と学

生支援に関する実証的研究, 2015, pp. 108-119.

〔学会発表〕(計3件)

- ①谷田川ルミ「現代女子学生のライフコース展望の諸相－仕事、結婚、育児に関するインタビュー調査の分析を中心に－」日本教育社会学会第67回大会(一橋大学), 2017年9月
- ②谷田川ルミ「大学生の将来展望－「内向き志向」は本当か－」日本教育社会学会第67回大会(駒澤大学), 2015年9月.
- ③谷田川ルミ「現代大学生のキャリアとジェンダー－15大学・大学生調査の結果から－」日本教育社会学会第66回大会(松山大学), 2014年9月.

〔図書〕(計2件)

- ①谷田川ルミ「子ども・青年とジェンダー」岩田弘三・谷田川ルミ編著『子ども・青年の文化と教育』放送大学教育振興会, 2017. (共編著)
- ②谷田川ルミ『大学生のキャリアとジェンダー－大学生調査にみるキャリア支援への示唆』学文社, 2016. (単著)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

谷田川ルミ (YATAGAWA, Rumi)
芝浦工業大学・工学部共通学群・教授
研究者番号: 20624266